

ふるさと  
歳時記



番匠川と白魚漁（三月）

弥生町上野の原田酒店（原田利光氏）では旧家を利用して明治以降の資料や調度品などを展示して公開している。

当家の創始者・理三郎は天保七年（一八三〇）椎茸をクヌギで栽培することに成功し、その功績は「鶴藩略史」にも記録されている。

はじめ佐伯藩で椎茸の生産をするため伊豆から職人を呼び、因尾村山部で下直見村の金右衛門にその方法を授けたが、もっぱらソヤキを用いていた。そのとき杣頭（まがしら）だった理三郎はクヌギを用いると椎茸の発生がよいことを知り、人々に教えたので生産量が増した。という。

そのとき藩主から褒美に拝領したという矢筈紋のついた脇差が伝えられている。また旧家は座敷を一段高くした上段の間になっているのも稀有なこと

古民家に明治の資料展示



原田家外観と室内展示会場

である。

展示資料は、酒造業を始めた明治以降のものがほとんどで、帳簿や証書、書簡などよく残されている。三月には雛人形を飾りつけたり、パッチワーク展を開いたり、趣向を凝らして、皆様の訪れを待っています。

## 「むかしむかしの会」来訪

三月三十一日、大牟田市「むかしむかしの会」六名が佐伯に来訪、城山と武家屋敷通りを散策、一泊して翌日「こぐまかみしばい・ひまわりの会」と交流した。

交流会では佐伯から昔話の紙芝居を二題、大牟田から三池の昔話一題が披露され、おたがいの活動状況や昔労話



むかしむかしの会（前列）と  
こぐまかみしばい（後列）

しに花が咲いた。

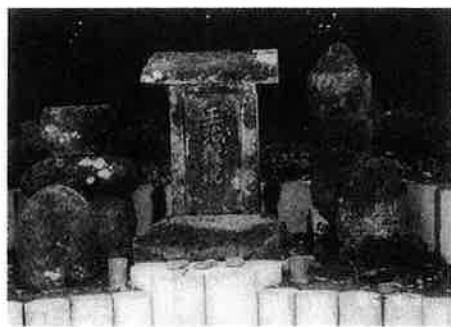
それにしても大牟田「むかしむかしの会」の高木文代さんの素話し（本を待たずに語る）には一同魅了され、感動の交流会になりました。

## 大内権現の桜と史跡

稲垣区の大内梅林は昔から有名だったが、「桜の古木を見に行ったら古墳があった」と市野瀬仁先生から電話があった。事情がよくわからなかったが、とりあえず一緒に出かけた。

大内集落の西側、山付の丘陵に花桜の樹容が望めた。二人で登って行くとな隣の赤峰寿将氏が作業をしていたので、話しを聞くことができた。

この丘陵地は稲垣区三班の共有地で権現様と地藏様が祀られている。周囲には年数の経った桜十数本と椿が一本花をつけていた。



「王治権現」の石祀と古石塔

北側山下にも明治期に作られた六地藏が並んでいて、以前は葬儀の際に利用され、葬儀の道具類は、丘陵にある地藏様の後ろに倉庫があつて保管されていたという。

赤峰氏はこの丘陵が藪になっていたことを気にかけていたが、退職後一人で藪を伐り開き古跡を整備し、つつじを植えこんで公園にしていたのだ。

一番高いところにコンクリートの基壇を設け「王治権現」と刻まれた石祠と周囲に転がっていた五輪塔や宝塔の断片を据えている。

その前方二ヶ所に小さな河原石を集めた塚が見られた。一つは円墳状で、その形を壊さないよう散らばった小石を拾い集め、土が流れないようにつつじを植えこみ、転がっていた灰石の宝珠が頂点に据えられていた。



桜の下の墳墓を前に市野瀬・赤峰氏

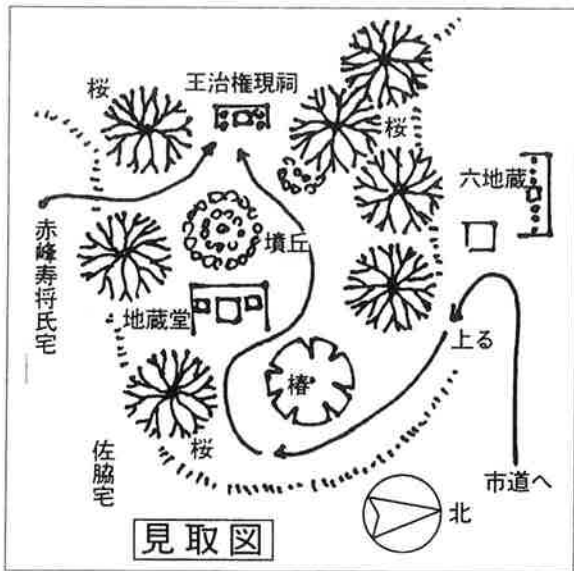
その下段にミカゲ石製の地藏菩薩を中央に二基の墓石があつた。これもコンクリートの床とブ

ロックの壁に瓦屋根を掛けて新しく整備されている。墓石には早世した童子・童女四名の戒名が刻まれ、年号は正徳・寛政・享和と江戸中期以降のものである。

北側平地にある六地藏の中央に単体の地藏菩薩座像があり「大内村中・明治三十九年旧五月」と刻まれている。

そのほか赤峰氏宅の敷地内から出土した板碑一基と五輪塔の頭二基が敷地の一角に祀られていた。

これらは大内地区の歴史を物語る貴



重な史跡と思われるので、今後の調査研究が期待される。赤峰氏をはじめ地区民の尽力によって、史跡公園として整備されたことに敬意を表したい。また今後、桜とつつじの名所としても市民の注目を集めることだろう。

## やぶ窯で三基目の窯始動

弥生町元田で「やぶ窯」を開いて三十年になる陶芸家市野瀬哲郎氏（五十才）は、裏山の傾斜地を伐り開いて穴窯を築き始動させた。

最初の窯は専門職に作らせた登り窯だったが、二番目は文献を見て中国式の古窯を自作した。今回最も古い形式の穴窯にこだわったのは、古代人が焼いた埴輪のように、土そのものの色合いと質感、火と土があえぎ葛藤して生ずる自然の風合を求めて…。

また地元にもこだわりを持ってゐる。この地方から出土する縄文・弥



生の土器、梅牟礼城下に残る土器屋の地名、毛利高政が朝鮮から連れてきた陶工に焼かせた波越焼（なんごうやき）、それ以後の久部焼（くべやき）など、焼物に適した土の探索にも心がけている。

四月一日に火入して四十八時間、窯の温度は千二百八十五度に達した。火を止めて窯の温度が下がるのを待ち、四月十日に窯出し。火の引きがよく隅々までよく火が通っていた。一つ一つの作品を手に一喜一憂、新しい窯に合った土選びや火加減など、これから試行錯誤が続いて行く。

## 龍護寺観音の開扉

例年四月十六〜十八日の三日間、秘仏千手観音のガン扉が開かれる。この観音像は定朝作（平安中期）あるいは安阿弥作（鎌倉中期）とも伝えられている。



安阿弥（あんなみ）とは快慶のことで康慶―連慶の門下、東大寺の勸進職重源の弟子となり安阿弥と号した。鎌倉新様の写実と宗様に、古い奈良様を考慮して一つの仏の理想型を造った。これを安阿弥様と称し、親しみやすい作風から庶民仏師と評される。

龍護寺観音には玉眼が入っており、これは鎌倉彫刻に盛行した手法だという。「毛利高政が千手をむしりとった」という伝説もあるが、正徳二年（一七一一）六代藩主高定（たかさだ）は、これを秘仏としてガン扉を封じ、新仏をガン前に置かせた。これが現在の前立観音である。

## 梅牟礼来訪者

三月十四日、大分市岡の清水さん三名が来られた。この日は古市地区の主催で梅牟礼登山会の日だったが、健康登山で歴史的な説明はないとのこと。そこで私が梅牟礼城下を案内することになった。

大分市岡地区には清水姓が二十数軒あり、清水家はそのむかし山津村大庄屋を勤めていた。山津村は江戸初期には府内藩、その後幕府領となり、正徳二年(一七二二)に延岡藩領となった。延岡藩の記録では山津村大庄屋佐伯作左衛門とあり、この二三代は佐伯姓を名乗っている。したがって清水家では大神姓佐伯氏の由来を伝えて来たのだ。

上岡十三重塔から今熊・愛宕神社、龍護寺、檜野の庵、そして梅牟礼城の代わりに小田山城へ案内した。駐車場には公衆トイレが建設中だった。

話しはかわるが、昨年の盆に大阪府吹田市の会員緒方惟幸氏一行三名が来られ、そのときの写真が最近送られてきた。

二度目の来訪で念願の梅牟礼登頂を期待しておられたので、弥生町蕨野の林道へ向かった。最近は利用者も少ないせいか林道の整備がよくない。しかもいつも大雨の後で路面はズタズタ、今回も断念せざるを得なかった。



路面崩壊で立往生 (梅牟礼登山道)

## 「新刊紹介」

◆向島物語 心に残る話

著作・さし絵 鳥井田菊雄

老人会で聞いた話しや、郷土の歴史の中から、フィクションを交えて物語りにした。読みやすく面白い。

童話三題・山里物語・真夜中の物語・

おつる物語・仏の手物語・甘藷物語・聖

女物語・番匠川物語・グラマンの攻撃

自費出版 A5版一七六ページ

(非売品) 佐伯市向島二丁目三番六号

◆神武天皇のお船出と海の道

謎解き博士と行く「もうひとつの旅」

シリーズ 発行・地域文化出版

文・測敏弘 画・財津秀邦

別府市若草町一〇一一

高千穂から神武東征の伝説地をたどる旅をはじめたが、そのほとんどが佐伯地方の記事で埋まった。

『前編』神武の足跡では、宇目町の

地名説話・畑野浦の伊勢本神社・米水津の地名説話・大入島の日向泊などを収録。『後編』謎解き推理では「佐伯は海大国だった?」・「堅田、青山郷がその鍵だ?」その他。

気楽に面白く読める、書店にて販売。

B 6版・六七ページ・六三〇円

### ◆逆境の人々

著者 田原久八郎・郁朋社

逆境で成功した歴史上の人物から現代人まで七九四名をリストアップ、日本編・海外編に分けて略歴を紹介、巻末に参考文献・資料を掲げる。

著者の後書「おわりに」では、きっかけ・分かったこと・遺伝と環境・九九・七%・「教育」の大切さ・自分を励ます・この本を通して・以上七項目をあげて「逆境は人を造る」ことを分析している。

佐伯市若宮町三一五（元高校教諭）

B 6版・三三二六ページ・一五〇〇円

### ◆伊勢参宮道中日記

編集・作画 佐藤巧

天保十一年（一八四〇）海崎村中野の河野七兵衛の記録を解説。大坂から高野山・奈良・伊勢・近江・京都を廻り大坂へ。その順路と名勝を解説、「伊勢神宮と伊勢参りの概略」では天正時代にはじまった佐伯の人々の伊勢参詣をひもとく。巻末に原文コピーを掲載。

A 5版 二六六ページ 手作り本

### ◆伊予国浮穴郡

久万山の佐伯氏・鶴原氏

「豊後佐伯一族」第七号 佐藤巧

久万山の佐伯氏を訪ねて紀行中、鶴原氏の墓石に遭遇。両氏の系図・その他の資料から系譜編纂の過程を解明。豊後・伊予の歴史に両氏の伊予居住のルーツを探る。

B 5版・四二二ページ・手作り本

### 〔表紙解説〕

三ノ丸櫓門は寛永十四年（一六三七）三代高尚代に鶴屋城の正門として創建され、六代高慶が再造、十一代高泰が三造したと記録されている。

昭和四十九年から市民の浄財を集めて昭和の大修理がはじまり、五十年三月に完成した。総監督にあたったのは藩の御用大工清田八五郎の末孫、後に史談会事務局幹事を務めた清田義雄先生だった。あくる昭和五十一年に県指定有形文化財となり、城下町佐伯のシンボルとして市民に親しまれている。

独歩の愛した城山、会長真柴茂彦先生が長年にわたり啓蒙された城山の照葉樹林、四月下旬ころ小椎の開花がはじまり全山を黄金色に染める。その生命あふれる躍動感を、人々は「山が笑う」と表現している。

もりもりと 黄金こがねふく城山やま 椎しの杜もり  
さこうたくみ